04.『街のテクスチャ』

街でみかけた建物や看板や壁面といった、「あれはナニ?」と気になったものを取り上げていきます。



夕暮れ時の景色も違って映る季節になりました。今回は観光客にも人気の「ノリタケの森」をご紹介します。昼間は緑の美しい芝生や噴水をバックに撮影する人々が多いのですが、夕暮れ時もライトアップされていてなかなか趣のある景色が楽しめます。ぜひこの時期に足を運んでみてはいかがでしょうか。

05. しんみち・採集記

安田印刷工業の近くでみつけたグルメや商品などを紹介していきます。今回はラーメン屋さんです。



菊井町交差点角にあるベトコンラーメン屋さん。ベトコンとは「ベストコンディション」の略。愛知県が発祥といわれるこのラーメンの特徴としては、まずニンニクがたっぷり入っていることと、こってり油で炒めたもやしとニラもてんこ盛りのラーメンです。写真は「あっさりベトコンラーメン」900円です。

ベトコンラーメン新京 菊井店【営業時間：11:00~15:00/17:00~23:00・不定休】
名古屋市西区新道 2-15-13（名古屋駅から徒歩約12 分）

06. Tomo's TALK 代表取締役社長 安田 智雄のコラム Overview





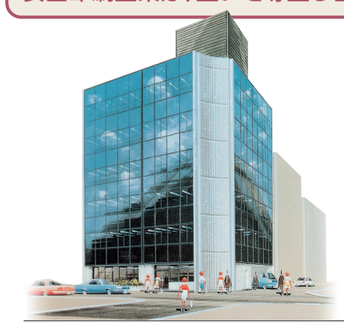
AI（アーティフィシャル・インテリジェンス）は、今や現代生活に欠かせない存在となっています。トランプ大統領はAIという言葉ではなく、SI（スーパーインテリジェンス）と呼ぶことを提唱していますが、ここでは一般的に使われているAIという言葉で話を進めたいと思います。

私自身も日常的にAIを活用しています。これまでGoogleで検索していたことも、今ではGeminiやOpenAIのChatGPT、Claudeなどを利用するようになり、情報の調べ方や仕事の進め方が大きく変わってきました。実際に、このエッセイもAIを利用してまとめています。日本でどれほどの人が利用しているかは定かではありませんが、もはやAIを使わない生活に戻ることは難しいのではないでしょうか。

一方、AIの急速な進化に伴って、新たな問題も生じています。AIを使ってプログラムのセキュリティ上の欠陥を発見し、システムに侵入して個人情報を盗み出し、悪用するといった事例も報じられています。便利な技術が、使い方によっては犯罪や社会の混乱を引き起こす道具にも得るのです。かつて盛んに語られたシンギュラリティ（技術的特異点）の到来も、2040年代といわれていた予測より早まる可能性があります。AIの進化が人間の制御を超え、社会に深刻な影響を及ぼすのではないかという懸念も高まっています。だからこそ、技術の進歩に対応した法整備や国際的なルールづくりが必要であり、開発する側にも大きな責任が求められるのではないでしょうか。

法令義務化に基づくカスタマーハラスメント防止について

安田印刷工業は、互いを尊重し合える健全な環境づくりと、カスタマーハラスメント防止に取り組んでいます。



2026年10月末日　発行
発行者：安田 智雄
発行所：〒451-0043
名古屋市西区新道2丁目13番10号

安田印刷工業株式会社
TEL.052-533-0088
FAX.052-571-1200

SNS・HPは
こちらから

NAGOYA 名古屋市認定エコ事業所

SDGs宣言企業を
応援いたします。

安田印刷工業がお手伝いいたします

各種印刷物からWeb、広告、販促物などお客様の思いを伝えることならお気軽にご相談ください。

【印刷物一例】名刺／DM／チラシ／ポスター／冊子／カタログ／リーフレット／POP UP／のぼり／懸垂幕／横断幕／パッケージ etc.

【経営理念】『球角球』お客さまの要望に応え 自らの成長を志し お客さまを創造し続ける

YASUDA
PRINTING CO., LTD.

より良い印刷のためにできること

SOUZOU

November 2026
Vol. 66
TAKE FREE



01. Print of Creative
紙とインキの「相性」を捉える
02. Shine's EYE
スタッフのひとりゴト
03. 今月の推し紙
04. 街のテクスチャ
05. しんみち・採集記
06. Tomo's TALK Overview

Yasuda Printing Co.,Ltd

01. Print of Creative



現場で聞いたいろいろなお話

紙とインキの「相性」を捉える

デザインデータを紙の上に表現する印刷工程。
データが実際の印刷物になるまでの現場の取り組みをオペレーターの方に伺いました。

紙の種類で、インキの見え方は変わりますか？

大きく変わります。例えば、表面に美しい艶のあるアート紙は明るくグロス感が出ますが、マット紙は照明の光を反射しにくく、しっとりとした落ち着いた仕上がりになります。また、サテン金藤に代表される「ダルアート紙」は、用紙自体はツヤを抑えたマット調でありながら、インキが乗った部分だけにアート紙のような強い艶が出るという面白い表現もできます。ただし、マット紙はインキの乾燥が遅いという特性があるため、濃いベタ塗りがあるデザインで後加工を行うと、加工機のローラー跡やキズに悩まされることが非常に多いんです。同じインキの量であっても、紙ごとに発色や質感がガラリと変わるだけでなく、扱ううえでの注意点も全く異なりますので、紙の性格に合わせた加減のコントロールが欠かせません。

紙の「目（繊維の流れ）」も関係あるのでしょうか？

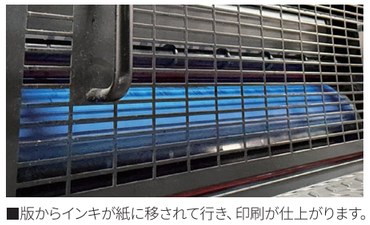
関係ありますよ。紙の繊維の向きを「目」と呼びますが、湿気を吸うとこの目に直交する方向に紙が伸縮します。これが原因で印刷中に色の重なり（見当）が微妙にズレてしまうことがあるんです。さらに印刷後、7月号で紹介した断裁や折りの工程に入った際、目に逆らって折ると、折り目がひび割れて白く目立ってしまう。そうしたトラブルを防ぐため、紙の目を計算したうえで印刷機の圧力や搬送のセッティングを調整しています。

これからの季節（秋冬）に特有の苦労はありますか？

一番の問題は、気温の低下による「インキの硬さ（粘度）」の変化ですね。冬場に冷え切ったインキはカチカチに固くなり、そのまま印刷すると紙の表面をバリッと引っ張って破いてしまう「ピック」という現象が起きます。これを防ぐためにヒーターで適正温度までじっくり温めたり、ローラーで練り込んで柔らかくしたりする作業が欠かせません。また、気温が下がるとインキだけでなく機内のゴム製ローラー自体がわずかに収縮してしまうので、トラブルを未然に防ぐための緻密な調整と日常的な点検もより一層重要になってきます。加えて冬の乾燥による静電気も厄介で、紙同士がピタッとくっついて機械の中で二枚重なって送られてしまう事故が起きるため、工場内の加湿管理も含めて冬場はとにかく神経を使いますね。

機械の「圧」やスピードも変えるのですか？

はい、紙の厚みや硬さに合わせて印圧をコンマ何ミリ単位で変えますし、インキの乾き具合を見て印刷スピードを落とすことも日常茶飯事です。



■版からインキが紙に移されて行き、印刷が仕上がります。

濃い色のベタ塗りが多いデザインのときは？

「裏移り」の防止に配慮します。刷り上がったばかりのシートが重なったとき、上の紙の裏側にインキがくっついてしまう現象ですね。これを防ぐために裏移り防止用のパウダー（スプレーパウダー）を散布するのですが、この粉の量が多すぎてもザラついて台無しになります。パウダーの量を極限まで微調整しつつ、刷り上がった紙を積む枚数を意図的に減らして風通しを良くするなど、次の製本工程に綺麗な状態で渡せるよう、手作業での細かなフォローを徹底しています。

金・銀や蛍光色など「特色」の場合はまた変わってきたりしますか？

通常の４色（CMYK）とはインキの性質も挙動も全く別物なので、セッティングの段階から毎回かなり慎重になります。特に金や銀などの金属粉が入ったインキは比重が重く、ローラーの上で滑らかに伸びにくい上に、紙への馴染み方も独特なんです。また、蛍光インキなどは透明度が高いため、下に敷く紙の色や重ね刷りする順番によって最終的な発色が大きく変わってしまいます。さらに、特色インキは乾燥に時間がかかるものも多いので、色味の再現性だけでなく裏移りや皮膜の強度まで計算しながら、インキの盛り具合や水加減を極限まで見極める必要があるんです。



■フルカラー印刷を支える基本の４色インキ缶（CMYK）シアン・マゼンタ・イエロー・ブラックの４色を重ね合わせることで再現します。

印刷中も常に監視が必要ということですね。

そうですね。機械が温まってくるとインキの柔らかさや湿し水の蒸発スピードがどんどん変わっていきます。そのため、刷り進行中も一定枚数ごとに紙を抜き出し、人間の目と測色計の両方でチェックし続けなければ、最初と最後で色がまったく違う印刷物になってしまいます。

前後の工程との連携で意識していることなどありますか？

まずはデザインや写真の再現性を崩さずに紙へ定着させることが第一です。そのうえで、次の断裁や製本へスムーズに渡せるよう配慮することも大切です。インキが完全に乾いていない状態で無理に次の作業へ回せば、裏移りや擦れの原因になってしまいます。印刷はあくまで一連のモノづくりの中間に位置する工程です。最終的にお客様の手元に届くものが最高のものになるよう、前後の工程を意識して刷り上げています。

02. Shine's EYE スタッフのひとりごと

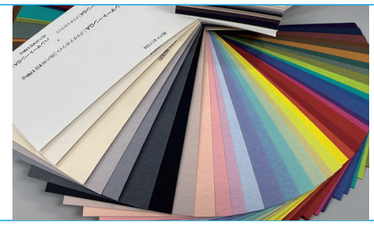


ライブの醍醐味（生産部 S）

最近はライブで東へ西へと動く機会が増え、ありがたいことに土日の予定が充実している今日この頃。直近では下北沢ReGにて開催された拠鳥きまゆ3rdOnemanLive「存在唱命 -Project:Nov4-」に参加し、ライブコンセプト「この日僕らは、——生まれ変わる。」、そのコンセプト通り、ライブにて新たに「KiMAYU」として生まれ変わる瞬間を目に焼き付けてきました。さて、今では音楽を聴くだけならスマホひとつあれば事足りますし、最近ではライブを配信してくれることも増えたので会場に行かなくても見ることができたりします。ではなぜ配信ではなく遠征してまでライブ会場へ向かうのか、それは非日常性とそこにしかない体験への期待につきると思う。今回参加したライブは、VTuberのライブでありながら生バンドで全編行われ（VTuberのライブではスクリーン越しのライブが多い）、一曲目が鳴り始めると同時に、会場全体の空気に熱が入るのが伝わってきて最高に熱いライブでした。普段イヤホンで何百回と聴いた曲でも、ライブでは重低音が体に響く感覚、照明や演出との一体感、アーティストのアドリブ、これらは耳で聴く音楽から「体で浴びる音楽」へと変わる。これは録音や配信では再現することができない、その場限りの体験だ。この瞬間があるからこそ会場へと足を運びたくなるのだろう。

03. 今月の推し紙

今回は、株式会社竹尾様が取り扱う紙でカラフルなファンシーペーパー、「ハンマートーンGA-FS」をご紹介させていただきます。



名前のとおり、槌で細かく叩いたような柔らかい打ちつけ模様のエンボスが特徴です。もとは金属加工の「ハンマートーン仕上げ」に由来する模様で、色の種類も50色とかなり多い紙になります。紙厚の種類も多いのでパッケージから名刺、招待状などといった高級感を出したい印刷物にオススメです。